静じま に痛し遠汽笛 の咆哮絶えて

凍てつく雪原に寒月の ゅんぱつ

の射しそえば

ひかり 登ま ひかり あお ひかり 虚空指す彼方宿り舎のそらさかなたなどで 灯は今宵また旅人ので、これに 三天樹の影は猛くして

継ぎ培いし迪を諭せりっ っちゃ ひと 豊水い 孤りそぞろに辿る日でと 黄ばむ空ゆく鳥もなく 雪融け水の溢れてはゆきどみずある 土の香ぞする野幌路をっょ の岸塵高い の旅を思い佗ぶかな

朝焼けて南に風の起 つ 聞き かば

0) 都に春近く

かの石狩の文学碑 延びる鉄路の傍のでのである。

に

金に輝く北指してきんかがやっきたさ

はろばろと続く沃野

0 玉葱ぎ

この地拓きし先人の夢 回がぬ 濁れる川に臨みては 化む夏陽になる 百年忘れずや に涙する

は